

## 川島重成『イエスの七つの譬え——開かれた地平』

(二〇六十六頁、三陸書房、二〇〇〇年三月、一三〇〇円)

田中利光

本書はイエスの譬えの「本来の意味」(一七頁)を、その七つの譬えに即して探り当てようとする試みである。その際、著者は、イエスの譬えをキリスト教の「聖書」としての枠組のなかでは、読まない、まずはギリシア語で残された作品として、いかえれば、西洋古典文学研究の対象として捉えたい、ホメロスの叙事詩に、あるいは、ソフォクレスの悲劇にむかうように接近したいというように、「序章」(八—二〇頁)で、その基本的姿勢を述べている。

著者(だけではないわけであるが)は、イエスの譬えは福音書記者によって編集された形で伝えられているので、福音書記者の考えが加えられている。この福音書記者的文脈において「がんにがらめにされている」(八二頁)枠組からイエスの語ったままの形をとり出すことよって、イエスにまで遡る譬えの本来の意味を探り当てようとする。別言すれば「キリスト教のドグマからは自由な一人間として、ちょうどホメロスの譬えに相對するように、イエスの譬えにもじかに向きあう試みをしたい」(二六一—二七頁)

というわけである。

あとがきで著者は、「本書は「イエスの譬え」研究のいわゆる専門書を標榜するものではありません」(二〇二頁)と言っているが、随所で、他の専門文献の所説を引照し、これを批評し、実に細密に所論を展開しており、評者はこの洗い出しの部分に最も関心をひかれた。

さて、著者は、「おそらくその原型がイエスにまで遡りうる可能性があると判断される七つの譬え(それ以外にはないというわけではありません)」(一九頁)を順次取り上げていくわけであるが、調理のプロセスは差し置いて、供された御馳走に、食いしんぼうの客よろしく、いきなりとびつくことにしよう。

一、「種蒔きの譬え」(マルコ伝四・一一—一九)

「神の支配」がイエスとともに到来したという「まさに三十倍、六十倍、百倍の収穫としか言いようのない喜びのおとずれ」

(三七頁)の事態を指しあらわしている。

二、「よきサマリア人の譬え」(ルカ伝一〇・二五—三七)

「受けるに値しない者に、全く予想もつかない仕方、さまざまな言訳だとかこだわりを圧倒するかたちで、突如現れ」(六〇—六一頁)た、イエスとともに到来した予期せぬ喜びの告知。

三、「盛大な宴会の譬え」(ルカ伝一四・一二—二四)

「イエスにおいて私たちの思い煩いや賢しさを圧倒して表現した「神の支配」の何たるかを、そしてイエスと共にあることの驚嘆すべき自由と喜びの消息を、改めて発見すべく招かれている」(八七頁)。

四、「見失った羊の譬え」(ルカ伝一五・一一—一七)

「イエスは、「神の支配」の到来とその喜び、私たちの考えるヒューマニズムの地平での喜びを圧倒するような、理不尽な喜びとしか言いようのない喜びを、この譬えを通して端的に宣傳伝えた」(二〇七—一〇八頁)

五、「放蕩息子の譬え」(ルカ伝一五・一一—三二)

「この譬えの父は、その途方もない喜びと愛の力のゆえに人間の地平を超える存在を暗示している」(二二六頁)。「二人の息子への父の愛の譬えだ」(二二七頁)。

六、「不正な管理人の譬え」(ルカ伝一六・一一—一八)

「近づきつつある「神の支配」の到来という究極のことに全身で備えよ」(二三四—二三五頁)。

七、「葡萄園の労働者の譬え」(マタイ伝二〇・一一—一六)

業績主義の人間が「生真面目な労働者たちに自己の姿を重ね、

彼らとともに憤慨し、大きな衝撃と挑発を受け、しかし雇い主のアイロニーとユーモアに支えられて、自己発見の新たな道に踏み出すように促す」(二七八頁)している。

以上は、著者が取り上げたイエスの譬えの元来の意味と考えている結論だけを、はなはだ無作法に、その結論にいたる、丹念な論証の過程から切り離して、むきだしに並べたものである。その結論について著者自身が次のように総括している。

七つの譬えに共通して立ち現れてきたのは、人間であること  
の「喜び」と「自由」のモチーフでした。イエスは「自由」と「喜び」を当時のさまざまな困難に直面していたユダヤの民に、彼らを慰め励ますために語ったのです。

「自由」と「喜び」——これが本書のキー・ワードです(二〇二—二〇三頁)。

実に風通しがよろしい。シンプルである。丹念な調理に裏打ちされたシンプリシテイというところであろうか。

しかし御馳走になりながら、こういうのもなんだが、いささか塩味が足りないような気がする。どこに原因があるのか考えてみるに、例えば、「放蕩息子の譬え」の年下の息子の「自己省察は、聞き手(あるいは読者)が見習うべき悔い改めとして描かれているのでしょうか」(二一九頁)というように問題を設定し、しきりに、それが「悔い改め」とか「回心」という宗教的言語から感得されるものではないことを強調し、「この譬えの前半部、年下の息子の物語の頂点、筋の転換点は、彼の帰郷の決心ではなく、

父の出迎えにあつたことが明らかになつた——中略——この前半部の中心が年下の息子の「悔い改め」ではなくて父の愛にあることを示しています」(一二二頁) というように、愛の力強さと喜びを強調するあまり、それがそもそもなにを対象とするものなのかという点がはつきりしなくなり、愛と喜びが、ひとり歩きをしているような感を受けるところに、塩味の足りなさを感じさせられるのではないかと愚考する。

それに著者は、放蕩息子の自業自得の認識は、「ごく普通の世俗的分別の域を出るものではなかつたのです」(一一九頁) という。評者もそうだと思う。そして「まずはギリシア語で残された作品として」考えた場合、ルカが「悔い改める」(ルカ伝) 五・七および一〇を参照) ということの内幕を、「立ち上がつて、ぼくの父のところへ行こう——以下略——」のような譬えで表されるようなこととして理解していたことは自明なのではないか。

著者は、ルカの「悔い改め」になにか、ある種の宗教的意味を固定させ、いわば影と相撲をとつているように思われる。

そのことは「見失つた羊の譬え」の解釈の中にもはつきり見てとれる。「四—六節の譬えそのものには「悔い改め」のモチーフはありません。見失つた羊が見つかったということが端的に喜ばれているだけです」(九二頁) という。同様に、続く「なくした銀貨の譬え」でも「悔い改め」のモチーフはないという。それなのにルカは「悔い改める一人の罪人」というような意味で譬えをゆがめ、がんじがらめにしていて、そこで著者のように福音書記者の文脈から譬えを解放しようというわけである。著者は、

ルカの「悔い改め」について、これをルカの編集意図とか救済思想というように称し(九三頁)、「イエスの元来の意図」をゆがめるものとして見ているわけだが、はたして適切であるうか。「まずはギリシア語で残された作品として」見た場合、「イエスの話を聞こうとして近寄つてきた。」「そしてイエスと」一緒に食事をしている」(ルカ伝一五・一一二を参照) ことが、「悔い改め」であることの内実であるとルカがとらえていたことは、まず動かないであろう。ところが、この枠組の中に「がんじがらめにされた」譬えの中には、著者は「悔い改め」のモチーフはないという。しかし繰り返して言うことになるが、「悔い改め」とか「回心」を宗教的言語とする(一一九頁) ような、なんらかの「前理解」に著者の方がとらわれているのではないか。この譬えによつて、「この喜びに加わるようにと、聞く者たちをイエスは招いていたのではないでしょうか」と著者は言っている(一〇八頁)。その通りだと思う。そしてルカは「喜びに加わる」ことを「メタノイア」と呼んでいるのではないか。

もつともこのように言えば、譬えそのものの中に「喜びに加わる」というモチーフを見ることには反対だと言われるかもしれない(一〇八頁参照。更に「聞く者の如何によらない絶対の肯定であつて、端的な喜びへの招きであつたと私は解します」(一〇八頁)を参照)。しかしそれはあまりにも zu wenig verstehen ということになるのではないか。

それにこういうこともあるのではないか。その喜びに加わりつつ、あらためて思い直して見れば、自分が「いなくなつた羊」、「な

くした銀貨」であつたという自覚（事後的あるいは同時的な）を呼び覚まされることを期待することなく、喜びに加わることへと招いているというようなことがありうるであらうか。はたして、これは「そのような聞く者の如何によらない」（一〇八頁）一方的な喜びへの招きであらうか。

うちわつて言うのと、「本来の意味」についての専門家の学識をうかがうことは、評者は決してきらいではない（非常な関心を覚える者である）。しかし他面、聖書記者といつしよに「誤る」方をむしろ欲する、とでもいうような氣持にさせられることがすくなくない。

（二〇〇一年十月四日記）